

自由民主党
総裁 安倍晋三様
幹事長 二階俊博様

2018年8月15日

杉田水脈議員の雑誌寄稿による性的少数者差別に抗議し、
差別の撤廃に誠実に取り組むことを求めます。

日本バプテスト連盟
性差別問題特別委員会

自由民主党衆議院議員、杉田水脈氏は、『新潮45』2018年8月号において、LGBT（性的少数者）の存在を否定し、侮辱する文書を寄稿しました。

特に、「彼ら彼女らは子どもを作らない。つまり、『生産性』がないのです。そこに、税金を投入することが果たしていいのかどうか。」という発言は、人を経済活動における生産手段としか見ておらず、全く人権を無視したものです。結婚し、子どもを産むのが当たり前という考えは、個々人の自由や事情を犠牲にするものであり、それは戦前、富国強兵が叫ばれる中で国家主義・軍国主義が肥大化して行った歴史と繋がります。

更に「常識」、「普通」という言葉を繰り返しつつ、LGBTの人たちを、その規範から外れていると、おとしめています。政治は社会的弱者、少数者の権利を守り、配慮する務めがあるのに、政治家自らが弱者を差別し排除する発言を公然とすることは、大変残念なことであり、強く抗議します。

そもそも、杉田氏のLGBT理解そのものが正確ではありません。杉田氏は、「LGB」と「T」を分け、「T（トランスジェンダー）」は、「性同一性障害」という「障害」であると言い切ります。しかし、「T」は「しょうがい」ではなく、性のあり方の一つです。また、杉田氏は「LGB」についても「性的嗜好」であり、更に若い時の「一過性」のものである、という言い方をしています。各々の性「指向」の真剣なあり方を、「嗜好」だと蔑むのは大きな問題です。

杉田氏の寄稿した文書内容そのものだけではありません。その寄稿が波紋を呼び、内外から批判が噴出した時、自民党の幹部たちの対応は、あまりに無責任でした。二階俊博幹事長は、杉田氏を庇いつつ、「人それぞれ、いろんな人生観、考えがある。」と語りましたが、これは、差別やいじめをも、「いろんな人生観、考え」として認めてしまうことです。多様性を語るのならば、まさにLGBTという性の「いろんな」あり方を認め、受けとめることを大事にすべきです。

二階幹事長は、その後も、「こういうことについて大げさに騒がない。この程度の発言があったからといって、どうだっていう話ではない。」とコメントしていますが、このような言葉は、自民党の政治家の本音が何であるかを、露わにします。杉田氏は、結局、党からの注意を受けましたが、しかし、杉田氏の寄稿に表された思想こそが、自民党の党是（政党の根本方針）なのではないでしょうか。

2016年から与野党共に、「LGBT法案」の成立に向けての取り組みがあるようです。自民党でも、「性的指向・性自認に関する特命委員会」が作られ、「LGBT理解増進法案」の立案が模索されていますが、今回の党の対応を見ると、どれだけ本気なのか疑問です。2020年の東京オリンピックに向けて、「人権先進国」を装う単なるパフォーマンスと思わざるを得ず、ピンク・ウォッシュに他なりません。観念的に「理解増進」するのではなく、現実には差別されている人たちの痛みを寄り添い、その差別や暴力を無くすための政治的取り組みを、今後、積極的、かつ誠実にこなすことを求めます。